

# 花の歌 歳時記

前田康子

足の裏だけは、子供の感覚のままなのだろうかと思うことがある。冬の河原に降りていて、枯草をばきばきと踏む音が好きである。靴下やスカートに草の種がたくさんつく。そんなことはおかまいなしに、ばきばきという音が続くまで歩き続ける。

枯草が積もっているところも、脚は通りたがる。銀杏の葉は少し反っていたりするので、かさばって落ちている。ぐしゃぐしゃとその上を踏んで行く。櫛の落葉はさらさらとしている。さくさくとその上を通る。アメリカカ鈴掛の落葉は大きく、ばりばりと気持ちのよい音がして脚の下でくだけてしまう。

並木道の落葉樹は、落葉がゴミになるからと、秋頃に枝を刈られてしまうことが、この頃よくある。枝を刈られず、しんしんと葉を落とし、その葉が根元の土に帰っていく木を見ると、幸せな一年を過ごしたような気分になる。裸になった枝先に、冬鳥達がとまって囀る声がある。



## シクラメン

出窓のついたしやれた家をこの頃、よくみかける。十二月、そこにシクラメンが置かれてみると、通るとき、暖かそうだなと見てしまふ。最近では花が小ぶりのものをよく見かける。

かがり火花、ぶたのまんじゅうなど変わった異名を持つ。かがり火花は、歌人の九条武子たけこがシクラメンを「かがり火のようね」と言った言葉を聞き、植物学者の牧野富太郎が命名したという。

シクラメン鏡にうるむとけてゆく遠いく  
ねった時間の果てに

加藤克巳かつみ 『球体』

不思議な絵画を見ているような一首である。鏡の中にシクラメンが見えているのであろうか。シクラメンの学名には「回る」という意味があるそうだ。野生種のもは花が終わった後、花茎が螺旋状らせんじょうになるかららしい。

寒き灯に紅の澄むシクラメン靴修理する  
人のかたえに

武川忠一たけがわい 『青釉』

黙々と、寒さの中、靴を修理する職人さん。通りに店を構えているのだろう。シクラメン

の暖かい色に、通り行く人もほっとした。

真剣に花を擽かげて年を越すシクラメンを  
妻深くいたわる

佐佐木幸綱ささきゆきつな 『金色の獅子』

シクラメンを育てるのは、案外難しいので

はないだろうか。手に入れた頃は、霧吹きなどで水をやっているが、二、三日水遣みづやりりを忘れると、花も葉もあつという間に元気がなくなってしまう。気を抜かず、子供を育てるように世話をしている妻を詠んでいる。

シクラメン





## 南天

雪が降って雪うさぎをつくるるとき、南天の木がないと困る。実を目につけて、葉を耳にする。小さい子供でもうまくつくれる。雪が溶けてしまった次の朝には、うさぎは跡形も

なく、玄関に赤い実と二枚の葉だけが落ちて残っている。

一度だけ本当の恋がありましたして南天の実が知っております

山崎方代「こおろぎ」

## 南天

山崎方代は、生涯妻子を持たなかった。それゆえに、とぼけたようなこの歌にも、何気ないリアリティを感じる。南天の実のような小さく紅い恋。いかにも方代さんらしい。

南天のしげみに降りてつもらねばくれなるの実は雪にぬれをり

尾山篤二郎「草籠」

南天は実も、紅葉した葉も雪の白さによく似合う。雪に濡れてつるりと光っている実はなお美しい。山から降りてきて、寒さの中、餌を探している鳥達の大切な食料である。

南天のごと赤き実を重さうに一杯付ける  
ピラカンサの木

奥村晃作「鶉色の足」

ピラカンサは、南天よりもやや小さい実がつぶつぶとなる木で、鶉などの鳥がたくさん来て食べている。食べてみたことはないが、南天の方はその成分の入った喉飴に、冬場いっもお世話になっている。

(まえだ・やすこ「塔」会員)